

小結

劉向が易によって諸五行説（特に諸物の配当）を関連付けようとしたのに対し、劉歆は一步進めて、易を天地人を貫通する根源的な理法と見なし、「一——三・五」という相似の（時にフラクタルな）構造によって、整然とした律暦度量衡論を展開し、祭祀の改革・体系的整備を唱えた。

その一方で、五行の配当については、月令説に合致させる改造が目立ち、易は時々取ってつけたように引用されるのみである。すなわち、諸概念の構造・数値を決める高次で抽象的な段階では易が中心的な理法であり、それによって導き出された諸物を五行や十二辰に割り当てるといって低次で具体的な段階では、月令が中心的な分類法となるのである。

ただ、劉歆は、月令の配当に基づき、『洪範五行伝』や五徳終始説を改造・整備し、分野を超えて五行説の体系化を図ったのだが、全ての五行説を月令に符合させるには至らなかった。例えば、『周礼』では鶏人が春官に、羊人が夏官に属しており、月令や『劉歆伝』が鶏を夏・視（火）に、羊を春・貌（木）に配当するのは合致しない。また、『周易』説卦伝が羊を兌に、鶏を巽に配しているのも、複雑な説明によって付会する必要がある。

このように、劉歆は高次の段階では易理によって万象の根源を「一」に集約させる一方で、低次の段階では月令を用いて、諸物を分野を問わず画一的に「五」「十二」に分類し、世界を整然と秩序付けて論じた。とりわけ後者の試みによって、様々な事象について類推して論じるという手法の幅が広がった。例えば、従来は介虫（甲・殻のある動物）は災異に関しては金、季節に関しては水という具合に、同一のものであっても分野によって五行の分類が異なり、他の分野で議論する際に基準がまちまちであった。しかし劉歆は介虫の配当を水に統一し、これによって災異や時期以外についても、水に当

てはめて議論することが容易になったと謂えるだろう。『周易』同人象伝に「君子以類族辨物」というが、「類族」が明確であつてこそ、「辨物」が可能なのである。

後漢になると、様々な学者が分野や学統を超えて、諸物の五行への配当を議論するようになる。そして、劉歆が『周易』説卦伝を付会しながら『洪範五行伝』を月令に適合するように書き換えたように、後漢の諸学者もまた、発祥・系統の異なる、相互に矛盾する諸五行説を、うまく摺り合わせることに苦心した。次の章では、劉歆以後の儒学者が、如何にして五行説を議論したかについて考察する。